

氏 名 さ とう よし ゆき
佐 藤 義 之
学位(専攻分野) 博 士 (人間・環境学)
学位記番号 論 人 博 第 7 号
学位授与の日付 平 成 13 年 11 月 26 日
学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目 レヴィナスの倫理
——「顔」と形而上学のはざままで——

論文調査委員 (主 査)
教授 有福孝岳 教授 安井邦夫 教授 小川 侃 教授 富田恭彦
教授 新宮一成 教授 篠原資明 教授 長谷正當 (大谷大学)

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、レヴィナスの思想の倫理的・哲学的射程を検討する試みであり、レヴィナスの二大主著『全体性と無限』と、『存在するとは別の仕方、あるいは存在することの彼方へ』（以下『存在の彼方へ』と略記）の解釈を中心にした二部（第Ⅰ部「顔」と形而上学、第Ⅱ部「方法の先鋭化」）十一章から成り立つ論考である。

第Ⅰ部では、申請者は、『全体性と無限』における「絶対他」や「無限の責任」等の基本概念を、事象の基礎を明確化しつつ問いつめるなかで、これまでのレヴィナス研究においては十分に究明されたとはいえない基本的諸概念を根本的に問いつめることによって、これらの概念の哲学的含意を解明することにつとめている。たとえば、「無限責任」という彼の自他非対称的な倫理学の特徴をなす概念について、申請者はそれを「歴史の裁き」という注目されることの少ない概念と関連づけることで、「無限責任」が『全体性と無限』の時期にすでに理性的には証明不可能なもの——それゆえ主体の決断によって意味を持ちうるもの——として位置づけられていることを指摘している。

フッサールやハイデガーに対するレヴィナスの批判は、レヴィナスに批判的な論者からは彼の無理解によるものとして斥けられる場合が多い。しかし、申請者は、デリダがフッサールとハイデガーを擁護して展開したレヴィナス批判を検討するなかで、倫理の学問に対する基盤性についてのレヴィナスの主張を正しく理解すれば、彼のフッサール等への批判は十分有効なものである、という独自の見解を披露している。ただし、そのように有効なレヴィナスの議論も、往々見られる現象学的的事象的視点と理論化のための視点（「形而上学」的視点）との齟齬のため、彼が分析する倫理事象との整合性を欠いていると、申請者はレヴィナスに対する批判的見解を述べている。

更にまた、デリダが、記述されることで「他」はある意味で同化されるのであるから、「絶対的に他なるもの」は記述されないのではないかという批判を加えたように、「絶対他」という、いわば記述できないものをいかに記述するか、ということに関わる方法的問題は、『全体性と無限』では十分には考察されていなかった。こうしたデリダの批判を一契機として、レヴィナスは『存在の彼方へ』を執筆することになるわけであるが、申請者は、『存在の彼方へ』の批判的検討を第Ⅱ部において展開する。

「他」という、記述できないものを記述するためにとるレヴィナスの戦略は、通常の「他」の性格を誇張して「絶対的な他」を描き出そうとする「誇張」という方法である。しかしながら、この方法は、上述の理論化のための「形而上学的な」視点を徹底化することを意味するので、その結果として、『全体性と無限』でも見られた事象との乖離がよりいっそう顕著となる、と申請者は指摘する。たとえば、他者の前における義務感は「強迫」と呼ばれるようになり、それは心理学で言う「強迫観念」のように外からの不合理な圧迫となり、私はそれに従う合理的根拠と自由とを欠いたまま、なおそれに従うことだとされる。このように、他者への倫理的対応には、完全な受動性が必要だとレヴィナスは述べているが、その条件を満たせば倫理に不可欠な自由——『全体性と無限』ではなお重要な働きをしていた自由——を欠いてしまい、倫理性自体を喪失しかねない、と申請者はレヴィナスを批判している。申請者は、この点の反省から、自他非対称的な倫理という事象的に

は同じものを分析しているケア倫理に着目し、ケア倫理における他者の「受容」という概念にある意味での「絶対的な他」を維持しつつ倫理に不可欠な自由を残す可能性を模索している。

なお、『存在の彼方へ』は、眼前の他者への無限の責任の倫理という起点から、社会における自他対称の倫理（「正義」）の基礎づけを図り、眼前の他者への責任の分析の倫理的意義の確保を目指す。この「基礎づけ」は、一見、基礎づけるものとしての前者の優越性を示すもののものでありながら、実質上は現実の倫理における後者の適用を追認し、後者に対し前者が無条件降伏することを意味しないか。申請者はこう自問したうえで、レヴィナスの議論を援用しながら、前者が後者に対しなお批判的に機能しうることを示す。ここで指摘された両倫理の間の緊張関係こそ、後者が形式化し倫理の実質を失った他者抑圧の手段に陥らないためには不可欠であるという。

以上述べてきたように、本論文は、レヴィナスの諸議論を、その欠点を無視して、その特異で魅力的な諸概念のみを際立たせることによって、レヴィナスをもっぱら称賛するという論述方法をとらずに、終始一貫して鋭い批判的洞察力をもって、レヴィナスの中心的問題を申請者独特の強い倫理的関心から真摯にかつ厳密に分析し解釈することを試みたものである。

論文審査の結果の要旨

本論文の基本姿勢は、現象学を標榜しつつも事象的な分析に乏しいレヴィナスの議論を、可能なかぎり事象に対応させつつ究明したところにある。このような姿勢は、ある意味では常識的なものだが、その基本姿勢を徹底した点に本論文の卓越性がある。事象に裏付けを十分えていない理論的要請がレヴィナスの理論を先導していることに注意を喚起し、特に『存在の彼方へ』の分析において、「誇張」という方法に基づきこの傾向が容認できないまでに高まっていることを「強迫」概念の分析を通じて示している。

このような批判的姿勢を貫くことで、本論文は、学界の注目を集めてはいるものの、いまだ十分な解明がなされていないレヴィナスの思想の核心に、かつて見られないほど深く切り込み解釈上の重要な知見を獲得している。『全体性と無限』に関して特筆すべきは以下の点を明らかにした点である。レヴィナスは他者を「絶対他」と位置づけるが、そう言うためには、この他者論は、例えばフッサールの超越論的現象学やハイデガールの存在論の枠組みのなかに捉え込むことが不可能なものでなければならない。レヴィナスの彼らに対する批判の核心もこの点にかかってくる。レヴィナスの彼らへの批判は、往々にしてレヴィナスの無理解ゆえの的外れな批判と片づけられがち——申請者の見解では、デリダもかつてそうしたように——である。しかし本論文は、このレヴィナスの批判が倫理の学問に対する基盤性という議論と関連していることを指摘し、その議論に依拠して彼の批判が有効であることを示す。この点は今までのレヴィナス論になかった成果である。更に本論文はこの論点を核にして、『全体性と無限』における「絶対他」概念の含意を際立たせている。

また、『存在の彼方へ』の鍵を握る「強迫」概念を明確化し、その問題点を指摘した点も重要な解釈上の成果である。この著作において「絶対他」を把握する方法的考察が深められ、絶対他にかかわる場合は、主体の一切の能動性が許されないものと理解される。このような絶対他理解は「誇張」の方法で得られたものであり、そのため事象との対応がとれているかを検討せざるをえない。申請者は検討の結果、主体の自由を排するこのような受動性が倫理に不可欠な自由を欠くことになるため、認められないと結論する。他性の哲学として無批判に称揚されがちな『存在の彼方へ』のレヴィナスの問題点を、彼の方法的概念にさかのぼりつつ説得的に指摘している。

本論文は、単にレヴィナス解釈にとどまらず、レヴィナス批判をふまえて倫理学の可能性を模索し提案しており、その点も重要な成果としてあげることができる。例えば、上記の『存在の彼方へ』の「絶対他」理解を批判したうえで、本論文は、レヴィナスの絶対他・非対称性の哲学を、ケア倫理に結びつけて解釈するという独自性を持つ。ケア倫理とレヴィナスの哲学は、その理論的背景の相違のため、比較対照がなされることは少ないが、扱う事象の共通性からすれば比較対照は有益である。申請者はレヴィナスの理論的硬直を克服するために、ケア倫理の「受容」概念を援用しつつ、倫理の新しい地平を展望しようとするが、これは今後の現象学的倫理学に対する一つの有益な提案である。

更に『存在の彼方へ』の「正義」概念の解釈においても、レヴィナスの提起した問題を解きほぐしつつ、彼が重視する、眼前の他者を起点とする倫理と、一般社会の倫理規範とのあるべき関係についての提案を行なっている。両者が相互に解消されてしまうことなく緊張関係の内にあることで倫理は実質を保っているという。このような倫理のモデル自体は必ずしも

申請者の独創によるものではないが、レヴィナスの倫理学の意義をとりだす手段としては、有効なものといえる。

以上述べてきたように、本論文の特徴は、レヴィナスの諸考察を、その欠点を看過して、その特異で魅力的な諸概念のみに着目することによって、単に称揚する道をとらずに、終始一貫して鋭い批判的眼力をもって、レヴィナスの中心的問題を真摯にかつ厳密に分析し解釈することを試みた点にある。本論文の論旨と論拠は首尾一貫しており、一々の論述においては決して抽象的思弁に陥ることなく、あくまで具体的事象に依拠しつつ、レヴィナスの難解で思弁的な議論を、優れた文章力と明解な筆致をもって解明している。

上記のように、いまなお研究途上にあるレヴィナスの中心的思想に透徹した理解を与え、またその倫理的な可能性を取り出して見せた本論文は、レヴィナス研究の今日の到達点を示しているといえよう。また、本論文は、人間・環境学研究科の基本理念にもよく合致している。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成13年8月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。